

## 〔特別展 呉越国展によせて〕

## 呉越国の中心に遺された日本の銅銭

「寺塔之建、呉越武肅王倍于九国」(寺塔の建造は、呉越国武肅王錢鏐の時に(五代十国の他の)九ヶ国の倍になった。)

清時代の朱彝尊『曝書亭集』に所載されるように、呉越国では代々国王が仏教を信奉し、僧侶を厚遇して多数の造寺や造塔を行いました。このような崇仏とともに、呉越国では国家の祭祀として、国や民の安寧を祈る道教の投龍簡が行われており、その際に用いられた歴代国王の銀簡が西湖(浙江省杭州市)や太湖(江蘇省)から出水しています(図1 第二代国王の錢元瓘五十三歳銀簡 浙江省博物館)。呉越国では国王の錢氏一族が仏教を篤く信仰し、道教を深く敬っていますが、最後の国王である第五代国王錢俶に至ると、仏教に比重が置かれるようになることが、史書などに記される事績や残された数多くの寺院・仏塔などに見ることができます。

呉越国はまた、海港都市の杭州や寧波を有しており、契丹(遼)や新羅、高麗、日本など東アジア諸国と通交を持っていました。その中

で、日本とのつながりは主に、海を渡る商人を通じて行われ、その内容には仏教に関わる事項が含まれています。

史書からうかがえる呉越国と日本の通交を、双方で応対がある事例について記します。初出は第二代国王錢元瓘の後唐・清泰三年(日本・承平六年(九三六)で、呉越商人の蔣承勳らが来日し、呉越国王(錢元瓘)から委託の贈物を朱雀天皇に持参、公的な通交関係を求めたものです。これに対して、贈物は返却され、左大臣藤原忠平から呉越国王宛ての書状が贈られています。また、後漢・天福十二年(日本・天曆元年(九四七)に呉越商人の蔣袞が来航、呉越国王(錢弘佐)の書状及び土産を献上しています。これに対し、左大臣藤原実頼が返書と砂金二百両を送り返しています。さらに、後周・広順三年(日本・天曆七年(九五三)には呉越商人の蔣承勳が来日し、呉越国王錢俶から右大臣藤原師輔宛の書状及び錦綺・珍貨がもたらされます。この時の呉越国

へ渡り、呉越国王より求められていた天台教籍を写書したものを送り届けています。日延はその後、後周・顯徳四年(日本・天徳元年(九五七)に帰朝し、その際に、錢俶が発願した銅製の阿育王塔一基などを請来しています。呉越国王は渡海する呉越商人を介して日本へ文書等を送っており、両国の通交には呉越商人が重要な役目を果たしています。このような人々と文物の往来が、実は双方の仏教史や美術史に対しても、深い影響を及ぼしているといえます。

呉越国において、日本はどのような捉えられていたのでしょうか。呉越国に遺された銅銭から、その一端を探ります。

呉越国最後の王である錢俶は、その治世の晩年に、妃である孫氏とともに西湖の南岸に雷峰塔を建立しています(図2 現在の雷峰塔)。この塔は開宝四~五年(九七二~九七三)に着工され、太平興国二年(九七七)に竣工します。その翌年の太平興国三年(九七八)には呉越国は北宋に帰順し、消滅します。呉越国のシンボルともいえる雷峰塔の塔基に築かれた地宮には、銅製釈迦如来像や銀製鍍金阿育王塔の他、玉製童子像など多数の宝物が奉納されて

いました。また遺址からはもう一基、天宮に納められたと見られる銀製鍍金阿育王塔(図3 浙江省博物館)が発見され、内部に奉籠された金製の舍利瓶が共に出土しています。地宮の床には様々な時代の銅銭が敷き詰められていましたが、その中には、唯一海外からもたらされた銅銭として、わずか直径1.8cmという大きさの平安時代の「饒益神宝」銅銭が一枚含まれていました(図4 浙江省博物館)。なぜ、日本銭である本銅銭が、呉越国王が建立した仏塔へ施捨されたのでしょうか。「饒益」とは仏教語で慈悲の心を持って衆生に恵みを与えることを意味します。推測にはなりますが、この言葉こそが、仏教を篤く信仰していた錢俶の心に響き、呉越国にとって重要な仏塔の地宮に納められたのではないのでしょうか。「饒益神宝」銅銭は日本においても出土例は少なく、呉越国にもたらされた経緯は明らかではありません。しかし、呉越商人が日本へ往来する中で呉越国にもたらされた可能性が考えられ、呉越国と日本の交流を直接的に示す貴重な出土品といえます。

(図1、3、4は本展覧会に出品されます。)

(学芸部 瀧朝子)



図1



図2



図3



図4